



シリーズ

TACという懸け橋

Vol.

7

「買ってくれる人」がいるからこそ、農業を続けることができる。生産者と手を携えながら、消費者とのさらなる結びつきを求め、日々奮闘するTACの姿を追う。

福岡県 JAにじ／JA全農ふくれん

新潟県 JA胎内市／JA全農にいがた

静岡県 JAとびあ浜松／静岡県JA営農センター

滋賀県 JA北びわこ／JA全農しが

愛媛県 JA西条／JA全農えひめ

宮城県 JAあさひな／JA全農みやぎ

☒ 岩手県 JA新しいわて／JA全農いわて

緑肥となる草が覆うダイコン畑に立つ佐々木仁志(右)・剛(左) JA新しいわて 澤口明浩(中)①

冬場は根ミツバを出荷する②

ニンジンの出荷作業をし、農業を学ぶフィリピンの実習生③

どんなことでも相談に乗る

冬は一面、緑肥となる草が覆うダイコン畑。そこに立つ親子、佐々木仁志・剛は、地域で数少ない野菜の大規模農家だ。岩手県沿岸部の冷涼な気候を生かし、夏場にダイコンやブロッコリー、ニンジンなどを合計13.7haで栽培。さらに開墾を続け、規模拡大を目指している。

しかし大面積を家族だけで切り盛りしていくのには限界があり、東日本大震災の被災地でもあることから、農業・漁業の担い手は足りていなかった。佐々木は外国人実習生の受け入れをJA新しいわて営農経済部のTAC・澤口明浩に相談した。「別の人には難しいと言われたが、本当に無理なのか——」。

平成24年6月。相談を受けた澤口は、JAの他のTACやJA全農いわてが集う会議にはかった。そこで県内陸部だが、JA管内の2地域で外国人実習生を受け入れていることを知り、現地で聞き取り調査。受け入れの制度や守るべきルールを学び、提案した。

「名刺の裏にTACの説明を書いている。『どんなことでも相談に乗る』『困難なことでも真剣に取り組む』と。それをきちんと実行しなければという思いだった」。澤口は当時を振り返る。

こうして25年5月県沿岸部で初めて、20歳と24歳のフィリピン人青年2人を受け入れた。12月下旬までの8カ月、ダイコン、ニンジンの種まき、ブロッコリーの収穫の他、草取り、防除などを実際に経験し、学んでもらった。

「本気になってやってくれている」

「遠くフィリピンから来ている。寂しいだろうと気を遣ったよ」と、佐々木は話す。澤口もよく様子を見に行き、休みの日には一緒に釣りに行った。実習生は近所の人たちとも馴染み、冷蔵庫はいつも届けられた魚やおかずでいっぱいだったという。彼らの存在が高齢化が進む地域コミュニティに少なからず刺激を与えていた。

実習生は、佐々木の経営にもプラスになった。ブロッコリーやニンジンで栽培を増やし、経営規模は前年から2.5ha拡大した。適期に収穫できて野菜の収量や品質が向上したため販売額が伸び、新たに農地の開墾もできた。

佐々木は、農産物の宣伝販売にも積極的に参加する。「この地域のことを都市に住む消費者に知ってもらいたい」「自分がつくったものを買ってくれる人を知りたい」という思いからだ。この地域で農業を営むこだわりを持っている。そんな佐々木は澤口をこう評価する。「彼は私たちのために、本気になってやってくれている」。地域や農業を盛り上げたという担い手とTACに共通した思い、そして絆がここにあった。



第8回JAグループ
国産農畜産物商談会

2014年3月12日(水)10:00~17:00/13日(木)10:00~16:00
東京国際フォーラム展示ホール 三階 JA全農/JAバンク/JA全中



TAC (タック) とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの
役割

- ①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
- ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
- ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの
由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL: 03-6271-8276
www.zennoh.or.jp

全農